Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報誌

第 55 号
（創刊：1994年12月15日）

南塘（なんとう）だより

2009年（平成21年）9月30日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：水沼英樹病院長補佐）
〒036-8563　弘前市本町５３
TEL：0172-33-5111（代表）
FAX：0172-39-5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/
※南塘とは，弘前帝史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言
～専門医養成病院ネットワーク～

弘前大学医学部
附属病院長　花田 勝美

７月10日，本学医学部と弘前市立病院（松川昌勝病院長）との間で「専門医養成病院ネットワーク」に関する協定が締結されました（写真）。弘前市立病院が最初の締結病院となりました。本学と弘前市との間に相互協力の協定が出来上がっていた上に，弘前市立病院指導部のネットワークについてのご理解と充実した診療環境があることです。歴史的には，本院の前身である青森医学専門学校・附属医院が戦禍を避けて旧弘前市立病院に移転したことなどもあり，まさに，第一号にふさわしい締結病院であったと思います。これまで新医師臨床研修制度のもとで，必ずしも，研修医が十分定着せず，本院としては危機感を募らせていました。しかし，更に重要なことは高度の医療が発達した現今，優れた医療技術を習得した専門医が育たなくなるということです。全診療科と指導者に圧倒的に恵まれている本院こそが専門医養成の中核になるべきとの認識から，今回のネットワークが立ち上がりました。したがってその目的は，①医師免許取得3年目以降の医師を対象とした専門医養成の実施，②指導医レベルの中堅医師の確保，③ネットワーク構成病院の機能を活用した専門医・認定医資格取得の促進，④専門医養成につながる卒前・卒後教育の推進，などです。決して，附属病院に縛り付ける制度ではなく，地域循環型の医師養成体制を整備し，これまで以上に連携を深めるというものです。専門医が育てば地域医療に多大な貢献をすることになります。

さて，「高度救命救急センター」の工事が始まりました。年度内に建物，機器の据付けを終えなければならず，すべてが急ピッチで進められています。本院はこれで診療体制が大きく変わります。近年にない巨大なプロジェクトであり，まだまだ難問が控えています。同センターの運営に関する問題解決のための「諮問委員会（委員長：福田幾夫副病院長）」を立ち上げていただき，明瞭な方向性を示した「答申」をいただきました。今後は，これに沿って準備が進められます。全診療科の先生方のご協力と提言をお願いします。来年度には，NICUの施設基準を満たし，GCUを充実させなければなりません。その後の環境整備も控えています。本院は躍進します。

今夏は，あっという間に過ぎ去った感があります。しかし，大学ねぷたを始めとして，本院小児科の子どもねぷた，ミニねぷたの展示，院内の七夕行事など，職員の皆さんの努力で津軽の夏を病院に居ながらにして満喫することができました。心温まる御協力に感謝申し上げます。

さて，新型インフルエンザが全国的に蔓延し始めました。落ち着いた対応に努めましょう。対応策の詳細は「感染制御センター」から報告されます。病院機能を維持するためにも集団感染は防ぎたいものです。　（21年8月25日記）

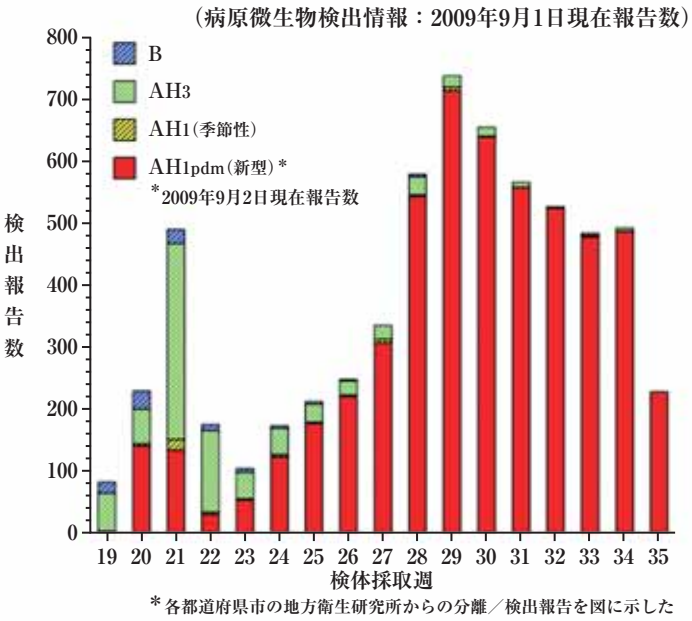
▲左から花田，佐藤医学研究科長，松川市立病院長

新型インフルエンザの現況について

3月末からメキシコの集団発生に端を発した豚インフルエンザは，4月30日WHO声明でインフルエンザA型（H1N1）と命名されました。幸い病原性は従来の季節性インフルエンザと類似することが分かりましたが，6月11日にはパンデミック宣言がなされ，パンデミック（H1N1）2009，A（H1N1）pdm，AH1pdmなどとも表記されています。

本邦においては，5月からの各地方自治体における積極的な対策により，新型インフルエンザの感染伝播が低く抑えられていました。しかし，7月に入って患者数の急激な増加が認められました（図．感染症発生動向調査によるインフルエンザの報告状況）。それに伴い，新型インフルエンザの全数検査は中止となり，集団発生からの疑い例と入院例の報告が継続されています。現状では，全国約4,800の定点医療機関からのインフルエンザと診断された患者の報告により，流行状況は十分把握できるレベルになっています。新型インフルエンザの診療も全ての医療機関での診察，治療が行われることとなりました。本院でも従来の季節性インフルエンザと同様の診療体制で対応することについて各診療科・部門等のリンクドクター，看護部長，看護師長を通じて院内への周知がなされました。

週別インフルエンザウイルス分離・検出報告数、2009年第19～35週
（病原微生物検出情報：2009年9月1日現在報告数）



＊各都道府県市の地方衛生研究所からの分離／検出報告を図に示した
（日本感染症研究所感染症情報センターより）

現在報告されている流行しているインフルエンザのウイルスは，ほとんどが新型インフルエンザウイルスAH1pdmです（図）。8月11日現在の厚生労働省へ報告された新型インフルエンザ（H1N1）による入院患者数は，119例であり，8月19日までに沖縄県，兵庫県，愛知県で3例の死亡が報告されています。

今回の新型インフルエンザは，北米型とユーラシア型の豚インフルエンザウイルスに，人と鳥のインフルエンザウイルスを加えた4種類の遺伝子が混合したもので，今後より高病原性の型への変異に留意していく必要があります。新型インフルエンザに対しても，季節性インフルエンザと同様，咳エチケットを励行し，手洗いを中心とする飛沫感染予防策と標準予防策を遵守することが大切です。

（感染制御センター）

各診療科の紹介
【総合診療部】

近年，社会の高齢化，生活習慣病の増加などとともに，各種疾患や病態における心理的社会的要因の関与が認識されるようになり，これとともに患者様の医療に対するニーズも多種多様になってきました。一方，医療の現場では，専門分化に伴い臓器別専門外来の整備・充実が進む反面，全身倦怠感や身体各部の違和感など原因臓器の推定が必ずしも容易でない症状があるため，どの科を受診するのが適当であるかがわからない患者様も少なくありません。

このような昨今の状況に対応すべく，平成16年7月より総合診療部外来が稼動しました。現在３名の医師が診療にあたっています。紹介状をお持ちでなく，自分の症状を診てもらうためには，どの科を受診したらよいかわからない患者様，また症状が身体疾患によるものなのか，ストレスあるいは心の病気によるものなのかわからない方などが，主な診療対象となっています。総合診療部での診察後，必要に応じて院内各専門科にご紹介をしています。地域の適切な医療機関へのご紹介も行っています。外来部門のみの診療科ですので，万一入院が必要な場合には院内各科に相談・依頼するようにしています。

開設以来受診された方々の主訴は，頭痛，めまい，しびれ，浮腫，胸部不快感，腰背部痛，腹痛，物忘れ，手足の痛み，喉の違和感，体重減少，不眠，気分不良，症状があるのに検査で異常が見つからなかった等，多種多様です。診察では，可能な限り患者様のお話を十分伺い，患者様と共に医療ニーズや問題点を整理すること，また全身の身体診察を十分行うことを心がけるようにしています。その後，検査や初期治療を行い，必要に応じ専門各科にご紹介しています。このような特徴があることから，臨床実習の学生に対しては，症候学や身体診察の教育に力点をおいて指導するようにしています。今後とも診療・教育に貢献できるよう頑張ってゆく所存ですので，どうぞよろしくお願い申し上げます。　（総合診療部長　加藤博之）

先憂後楽
小さなミジンコと大きなイゴール

病院長補佐　藤 哲

以前，ジャズサックス奏者でミジンコ研究家の坂田明氏の講演を聴く機会がありました。坂田さんの人柄そのものの大変ダイナミックでありながらミジンコ的に細やかでヒュマニティに溢れた話でした。結びの言葉がまたとりわけ感動的で，以来頭のポケットにしまって持ち歩いています。坂田さんは「北極の氷の下で，あのミジンコ達はどうしているかな，子供はできたかしらなどと思うと，うれしくなってしまう」とおっしゃったのです。

ちょっと飛躍しているかもしれませんが，この，思いを馳せるということ，うれしくなってしまうという気持ちが，伝えること，聴くことの出発点であり一番大事なことのように思えるのです。

IT革命といわれる今日，電子メールという便利なものがあり，携帯電話の進化・普及は目覚ましく，時間・空間の隔たりをも克服され，「地球村」というほどに世界は狭くなり，互いの理解も深まり等々，と言われはしますが，これが全くの幻想であるということは日々感じる事実です。むしろ，伝達手段が速やかで便利になればなるほど，疎外感が増大してさえいるようです。

もしかしたら人間はこの便利さやスピードに魅せられるあまり，ゆっくり考えること，思いを馳せる能力を失いかけているのかもしれません。

氷の下のミジンコ達のことを思う坂田さんは，秋田沖のハタハタ達に思いを馳せチェルノブエリの子供たちのために音楽を演奏し，多くの人の共感を呼んでいます。

私は遠いセルビアで，バスケットボールの選手イゴール・ラコチェビッチ少年の手を手術しました。遠く離れた国の患者であるゆえになおいっそうこの少年のことが気にかかり，セルビアの歴史を調べ，コソボ紛争を憂い，NBAの試合結果が気になり，オリンピックというとイゴールの名前を探しました。この作業が楽しかったのはいうまでもありません。

2006年の世界バスケットボール選手権で，彼がキャプテンとしてセルビア・モンテネグロチームを率いて仙台にやってきた際10年ぶりの再会を果たすことができました。もう29歳，立派な青年となったイゴールの心からの笑顔に会った時のうれしさは，10年分の楽しさが加わり，それはそれは格別のものでした。

泌尿器科が弘前大学表彰を受賞しました

▲6月1日に行われた表彰式の様子

5月31日付けで，本院泌尿器科が「弘前大学表彰」を受けました。低侵襲手術（ミニマム創前立腺全摘術・同膀胱全摘術・回腸新膀胱）の開発と普及による社会貢献が表彰の理由です。言うまでもなく私たちの医療活動は本院全体のチームワークを基盤として成り立っていますので，今回の表彰は本院の高い診療能力と協力体制が評価されたものと思っております。日常診療でご協力頂いております附属病院の皆様に心から感謝申し上げます。

ここ数年，新聞や雑誌では「病院の実力評価」と題して手術件数で「病院の実力」をランキングする企画が数多く報じられています。アウトカム評価を無視して手術件数のみで病院や診療の実力を評価できるはずはなく，このような報道を鵜呑みにはできません。しかし，ある診療行為を多数実施しているということは，安全に一定レベルの診療を提供していることを意味しますので，「病院の実力」を評価するひとつのパラメーターにはなり得ると思われます。当科は2005年から毎年，前立腺全摘術の手術件数が全国トップレベルにランキングされるようになりました。特に患者様に優しい低侵襲手術部門では１位の実績をあげるようになりました。

私たちの術式は術創6cm（通常は15-20cm）で腹腔鏡補助下に前立腺を摘出する方法で，先進医療認定を経て昨年４月から保険収載されるに至りました。この術式は膀胱全摘術や腎摘術にも応用されています。膀胱全摘をした場合には，当科で独自に開発した回腸新膀胱（弘前膀胱）を作ることで自然な排尿を可能にしています。朝日新聞社の2009年度版「病院の実力」では前立腺全摘術に加えて，腎摘術と膀胱全摘術も評価対象に加えるようになりました。それによると，当科の手術件数はこの３部門すべてにおいて上位にランクされ，膀胱全摘術は国立がんセンター中央病院，癌研有明病院に次ぐものでした。

がん専門病院とは異なり，高度に進行した病気の患者様，高齢の患者様や様々な合併症を有する患者様を対象としているのも本院の特徴です。この事実こそ真の「病院の実力」を示すものと確信しております。麻酔科や外科系診療科のみならず，手術部，病理部，検査部，放射線部，薬剤部，循環器内科，呼吸器内科，消化器内科，糖尿病内分泌内科，腫瘍内科はじめ本院全体の高度な診療レベルに支えられて日々安全な手術をさせて頂いております。特に，本院の約２倍の病床を持つ旧帝国大学病院をはるかに凌駕する件数の全身麻酔（国立大学病院では２番目）を実施しつつ，優れた麻酔技術を有する本院麻酔科と充実したICUの存在は外科系医師として大きな誇りです。加えて，本院は診療科間の協力体制が素晴らしい。これらの長所は他の大学病院との比較によって明らかになるものですが，私たち附属病院職員は本院の優れた点をしっかり認識する必要があると思います。

これからも安全第一で良質な医療の提供に努めて参りたいと思います。

▼受賞した泌尿器科職員一同

青森県看護功労者知事表彰を受賞して

看護部副看護部長　安部よし子

この度，6月13日に開催された青森県看護協会通常総会において，平成21年度青森県看護功労者知事表彰を受賞しましたので，ご報告いたします。

式典で知事から「自らを律し，人を慈しむ心を後進に伝え，命を救うために全力で働いたことに感謝する」という言葉をいただき，改めて看護師生活37年を振り返ってみました。

入職した頃は，とにかく先輩の『技』を盗むことに必死で後ろをついて歩きました。先輩達には，行動の一つ一つに無駄な動きがありませんでした。それは，解剖生理や病態の知識は勿論のこと，看護の知識・技術・態度を基にした観察やフィジカルアセスメントに熟知していることで，患者に予測した看護が提供できていたのだと思います。私の数々の失敗にも，時に厳しく，時にやさしく人を包み込むおおらかさがありました。毎日の申し送りの時間では，いい緊張感が漂い，いつになったら憧れの先輩のようになれるのだろうか…と，病院と自宅の往復だった頃が懐かしくもあり，新鮮に思い出されました。

37年の間には，医療を取り巻く環境が目まぐるしく変化しました。看護界にもIT化の波が押し寄せてきましたが，看護の本質は変わっていません。看護部では，足かけ３年の歳月をかけて『看護基準』を整備しました。特に，療養上の世話として，しごく当然なことを，しごく普通に，さりげなく行い整える＝患者にとって気持ちのよいケアを提供するために，生活行動援助技術に11項目（食事・睡眠・清潔・療養環境整備…）を挙げ，ベッドサイドケアの充実を図っているところですが，まだまだ自問自答の毎日です。

今回の受賞に際し，Ｆ・ナイチンゲールの「看護は学んでも学んでもつきることのない一つの道である。もし私が病気で患者の世話ができなくなったら，私を看護してくださる方から学びましょう」という言葉を思い出させてくれました。

最後になりましたが，砂田看護部長をはじめ，看護部職員の皆さんに支えられて，看護師という職業を続けてこれたことへの受賞に，感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。

この人 No.2

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。

医療情報部
船水 亮平 さん

医療情報部にいる芸術家のように髪をはやした人は船水亮平さんです。ところが船水さんは「ように」ではなく，本物の芸術家，写真家ですので，まずそのことを紹介します。写真の題材は風景や神社仏閣，歴史的建造物で，弘前大学総合文化祭職員芸術・造形作品展では毎回「学長賞」，日本原燃「わたしの好きな青森」写真展では入賞（原燃カレンダーの背景に採用）など受賞歴を重ね，作品の一部は弘前大学オリジナルグッズ『弘前の素敵な風景を友達に贈りたい』ポストカードとして商品化されています。生協でどうぞご覧下さい。

船水君の本業はコンピュータ・ネットワーク技術で，硬（ハード）軟（ソフト）取り混ぜ何でもこなすエキスパートです。昭和51年から平成８年まで医学科の生理学教室で当時の教室主宰者から懇切にして徹底的な指導を受け，本来持ち合わせていた技能を飛躍的に開花させたと思われます。（ちなみに，現在医療情報部にいる教員２名も曾ては生理学教室に在籍していましたが，指導に値しないと見做されたため，そこを去りました。）

船水さんは類い希なる芸術的センスと卓越したコンピュータグラフィックス技能を駆使し，今日も病院のために頑張っています。

最後に，外来診療棟１階ホールに堂々と展開された「岩木山と弘前」のパノラマ壁画は船水さんの作品です。（医療情報部　羽田隆吉 記）

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われ，弘前大学のねぷたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として，１日，３日，５日の３日間参加し，昭和39年に初参加以来，連続46年の出陣を果たしました。

３日には本院構内において，小児科に入院中の子供達や保護者，医師，看護師及び事務職員等による「小型ねぷた」が運行され，子供達は太鼓と笛の音にあわせて「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

また，病院内では外来診療棟の入口や渡り廊下等にミニねぷたや手持ちねぷたが飾られて祭りムードを盛り上げ，来院された患者様にも大好評でした。（総務課）

七夕飾り

７月７日の七夕にあわせ，患者様ご家族様を始めとする来院者の皆様から病気の平癒を願うお気持ちを込めた短冊を飾っていただくため６月22日から７月７日まで外来診療棟入口に笹竹を２本置かせていただきました。

飾られた短冊の一枚一枚を読ませてもらいましたが患者様ご自身の病気は勿論，ご家族様の病気に対して，「治る」・「治す」という強い思い，「生きる力」への強い望み，「夢をあきらめない」というひたむきな姿など一言一言ひしひし伝わってきました。また，字の書けない小さなお子様からは可愛らしい絵などで，病魔を消そうという絵を描いたものなどもありました。そのうえ，本院の医師や看護師等医療スタッフへの感謝を伝えるものなどもあり，日に日に笹竹はしなり，飾り付けした二週間の間に1500枚余りの短冊が飾られました。

取り外しました短冊の一部は，苦しまれている皆様の切実な思いを少なからず理解していただくため，良医を目指し日々勉学に励んでいる学生への教材として提供させていただきます。

また，笹の葉と短冊は環境に配慮しながら皆様の願いが叶うように，病院のそばを流れている寺沢川に流しました。（医事課）

院内コンサート開催

入院患者様のために院内コンサートを開催しました。

６月19日に「気分転換に音楽はいかがですか。」と題しまして，地元で活躍している演奏家を集め，シャンソン，津軽三味線，登山囃子，ギターとサンポーニャによるギターの名曲，ジャズナンバーなど，多彩なプログラムと感動的なステージに患者様が聞き惚れ，沢山の元気をもらいました。

７月30日には青森市立篠田小学校生徒，OB，PTAの皆さんによる「ねぷた祭りさきがけお囃子演奏会」を開催しました。「青森ねぷた囃子」「五所川原立佞武多」「ジブリ・ミュージック」が演奏され，子供達の元気一杯な演奏に，祭り気分を味わうことができ患者様は元気づけられました。

８月７日には，恒例となっている弘前大学医学部管弦楽団＆医学部創立50周年記念アンサンブルの「夏の院内コンサート」を開催しました。初夏から秋をテーマとした名曲の数々，島口和子先生のチェンバロを加えてのバッハ，コレルリのバロック音楽，夏の暑い夕餉の後のひととき心身ともに優しく癒される空間を持つことができました。（医事課）

▲ねぷた祭りさきがけお囃子演奏会の様子

【 編集後記 】

南塘だより第55号をお届けします。執筆の労をおとりいただいた方々に御礼申し上げます。

夏の終わりの憂鬱を感じる暇なく，空には赤とんぼが舞うようになりました。近頃，メディアが好むキーワードは「地球に優しい」。私も自前の箸を携帯しようかと一瞬思いました。記録的豪雨も温暖化のせいだと言います。新型インフルエンザが日本に上陸した春，「感染列島」の緊張感が市井を覆いつくしました。今は，流行にも関わらずマスク姿は見かけません。この違いは，メディアの取り上げ方の温度差によるものと思われます。メディアの影響力は絶大です。

今度，FMアップルウェーブ（ローカルメディア）で本院の広報活動を始めることになりました。この企画に，協力のほど宜しくお願い致します。

（広報委員　佐々木賀広）